

〈知的生産の技術〉といわゆる〈アカデミック・スキルズ〉と〈司書資格科目〉と—その交差と乖離について（その三）： recall & retrieval 想起と検索（試稿）

水谷長志

章立て

1. はじめに—そして僕は途方に暮れる
2. 筑波の地での“情報検索”との遭遇をふり返るときに
3. レファレンスプロセスおよび検索語と索引語の照合プロセスの二極にかかわる古典的論文を接続させるために
 - 3.1 検索語と索引語の生成と照合について
 - 3.2 Taylor (1968) におけるレファレンスプロセスを既刊邦語論文に拠って確認すると
 - 3.3 Lancaster ほか (1993) における検索語と索引語の照合を既刊邦語論文に拠って確認すると
4. 「途方に暮れ」ながらの検索を考える
5. 想起と検索
 - 5.1 実は未知検索は「脳内検索」という「想起」から始まるということ
 - 5.2 想起とプラトンとアーリントンについて
 - 5.3 記憶術と想起と検索について
6. おわりに—アーカイブに描き込まれたアーリントンの《コルス・コピア》

1. はじめに—そして僕は途方に暮れる

朝起きてから寝るまで、情報を求めて情報に従って生きている。今日は何曜日なのか、講義はあるのか、あるとしたらそれは新座か茗荷谷か、何限か、科目は、などなど学期内の平日であればまずはそこら辺の情報の「確かめ」を毎日重ねている。次の具体的な行為、それが朝起きてからまずは始める歯磨きのような習慣的なものであり、身に備わった無自覚な体内への、より正確に言えば脳内の参照系を一瞥している瞬間があるが、それらはあまりに短い故に明確には自覚されないことであるにしても、一瞬の一瞥は確かにあるに違いない。

ここまでの行為においての「確かめ」は、体内的所与のための参照—ごく軽い我が身の内への検索（以後、これを「脳内検索」と名付けよう）で用は足りていても、いざ扉を開けて自宅を出るとそこから押し寄せる社会と世界のあれやこれやとの対面が始まると、必要情報を求めて、我が身の外への検索（以後、これを「体外検索」と名付けよう）を重ねていくことになる。

それは「探索（サーチ：search）」とも一般に呼ばれて久しいし、多くの場合は、手もとにあって手軽なスマホの画面に待ち受けている検索の窓へ「言葉」を投げることから始まる、「ググる（Google）」という行為を重ねていくことになるだろう。

「探索」であれ、「ググる」にしる、スマホの画面にぽっかりと空いた窓へ「言葉」を投げられる程度においては、既知の事からの確認、ないしは回答（もしくはインターネット空間、それが何処か・どの範囲かなどを問わずとも）の「在る（もしくは蓄積されている）」を前提にしたお尋ねという「検索」ということである（いまそれを「既知検索」と名付けておこう）。

ここで述べる「言葉」とは後段において述べられる「検索語」であることを、どうか確認されたい。

私たちは今日、漠然としていながらも必死な、そして確かに存在する我が身の課題を前にしながらも尋ねられない何かの「探索」の局面を迎えねばならない時と場合がある。

それは往々にして、スマホの「ググる」の窓に一言も、なにものをも書き込めないで立ち盡す時、一瞬であれ我が身を痛切に襲い、耳元でかすかに流れるのは、銀色夏生の歌詞による「そして僕は途方に暮れる」の大澤誉志幸の歌声であったりするるのである。

2. 筑波の地での“情報検索”との遭遇をふり返るときに

いまは筑波大学の一学類となって久しい図書館情報大学に学んだ時、伝統的な図書館学の例えば目録法や分類法に比べて、清新に感じられたのは「情報検索論」だった。もう40年も前のことだ。

ちょうどその頃に、当該学問分野の最初の概説書として世に送り出されたのが慶應義塾大学文学部図書館・情報学科（こちらには「・」が入っていまに至る）を先導されていた津田良成先生（故人）が編者となる『図書館・情報学概論』*1、第5章が「情報の蓄積、検索」と章名されて、「蓄積された情報の中からある特定の属性を持つ情報を選択することを情報検索という」と定義され、さらに「属性としては、情報の集合からその部分集合が導き出されるのであれば何でもよいが…索引語、検索キー、アクセス・キーなどと呼ばれている」と続いていた（索引語の下線は水谷による）*2。

当時から情報検索は、Information RetrievalのアクロニムであるIRとして略記されているが、より正確にはこの概説書の章名や定義からも分るように「蓄積（Storage）」が常に前提としてあること、とりわけ冊子体逐次刊行物である抄録・索引誌の形成と出版を歴史的背景に持つ電子化された書誌データベースにおいては、その前提の承認と認識は必須であった。

であるから、当該分野の初学者には「^{retrieve}検索」のイメージの喚起のために、しばしば当時の情報検索論の担当講師たちから聴かされた、あの聡明で心優しい大型西洋

犬であるゴールデンリトリバーの説明としての「元来、水鳥猟でハンターが撃ち落とした獲物を陸地に持ち返る（=retrieve）役割を担う犬」はまことに相応しいものであった*3。

情報の「検索」が撃ち落された一羽の水鳥、確かに存在を保証された獲物を「持ち返る（=retrieve）」ことであるのに対して、「探索（サーチ：search）」においては獲物の存在は保証されていない「探す」行為であるし、「ググる（Google）」も広大無辺に拡張したインターネット空間への問い合わせであることを考えれば、従来からの「検索」が「既知検索」であるのに対して、「ググる」行為は時として、問い合わせそのものを拒否する、すなわちスマホの画面にぼっかりと空いた窓への「言葉」の投げかけを果たせず立ち盡す、「未知」なるものへの探索に逢着したとしても、それはもしかしたら当然の帰結と言っても良いであろう。

本誌のこの連載の初回において取り上げた『独学大全』の著者である読書猿氏が、「私が私淑する「探しものの魔法使い」が書いた司書の奥義を公開した本」と評した『調べる技術—国会図書館のレファレンス・チップス』という新刊本の著者である小林昌樹氏が、その第5講を「見たことも、聞いたこともない本を見つけるワザ」と題して、「「未知文献」を見つける方法がある」ことを、「見たことも、聞いたこともない本を見つけるなんてことはできるのだろうか？」と手に取った読者に問いかけて、「しかし、あるのだ、そんなワザが」と展開した*4。

本稿の「はじめに」で述べた「途方に暮れる」寄る辺の無さは、それは実のところ、この「未知文献」の「探索」に、すでにお分かりのように「検索」とは書き難い事態に立ち至っているのであり、それは、「スマホの画面にぼっかりと空いた窓への「言葉」の投げかけの困難に同じい。

* 1. 勁草書房, 1983.5.20 刊, 239p.

* 2. p. [112], 細野公男氏（同学科教授）による。

* 3. <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B4%E3%83%BC%E3%83%AB%E3%83%87%E3%83%B3%E3%83%BB%E3%83%AC%E3%83%88%E3%83%AA%E3%83%90%E3%83%BC>
以下、*を付した注における URL の参照日付は、2022-12-30

* 4. 『調べる技術—国会図書館のレファレンス・チップス』皓星社, 2022.12.23 刊, p. 59.

3. レファレンスプロセスおよび検索語と索引語の照合プロセスの 二極にかかわる古典的論文を接続させるために

3.1 検索語と索引語の生成と照合について

既知の事柄についてであれ、課題解決のために自らもまだ見ぬことの「未知」に向かうのであれ、言葉を代えて言うならば「検索」であれ「探索」であれ、まずは私たちが今日容易に入手可能な情報獲得の手段と行為のプロセスにおいては、「言葉」を用意することは、いずれにあってても必須のプロセスとなる。

図書館においては謂ゆる参考調査と言われ、レファレンスと称されるサービスのプロセスにおいては、「探す人」が情報を求める行為の初発にあってはそのニーズそのものが曖昧模糊であっても、図書館員とのインタビューなどの接遇を通じて、段階を追って言語化していくことが肝要であり、それはレファレンスプロセスとして図書館情報学においては認知・定着されてきた。その古典的言説として、Taylor (1968) の論文が著名である*¹。

また、本稿の先行章で下線を引いた検索語と索引語の「^{matching}照合」こそが、情報検索の要であるところについては、Lancaster ほか (1993) の論文が重要であり、注目されてきた*²。

下記に掲げる図1は、その Taylor と Lancaster の論文を接続させようと試みたものである。以下の節において、ほぼ中央右寄りの検索語と索引語のマッチングに至る、左右双方からの流れを、3点の邦語文献に拠りながら検討してみたい。

3.2 Taylor (1968) のレファレンスプロセスを既刊邦語論文に拠って確認すると

1986年に『サーチャーの時代—高度データベース検索』（丸善；2版、1992）を世に送った三輪眞木子氏は、2003年には『情報検索のスキル—未知の問題をどう解くか』を中公新書の一冊として著した。前者が情報化時代の先端に立って新しきインフォメーション・プロフェッションとしての「検索する人」≡「サーチャー」を世に広めて、後者は「情報を探しながら問題を解決する「情報スキル」をひとりひとりの日本人が身に付け」ることを慫慂するものとなった*³。

『情報検索のスキル』が一部の専門プロフェッションの技能から誰もが習得することが欠かせないものへと変容した、時代の移り変わり、その途中に日本のインターネット元年である1995年があるのだが、20年に満たない時間の中での変化の早さと広がり、この二書が如実に示しているのである。

『情報検索のスキル』の2章「情報探しと構造化される知識」の「2.1 情報探しの特徴」において、三輪氏は Taylor (1968) の論を紹介して、「情報問題解決プロセスにおける情報ニーズの変化」を次の4段階として邦訳して説明している*⁴。

[第一段階]：心奥のニーズ (visceral need)

[第二段階]：意識したニーズ (conscious need)

[第三段階]：具体化したニーズ (formalized need)

[第四段階]：妥協したニーズ (compromised need)

以上の論を踏まえて、さらに渡邊由紀子氏は国立国会図書館の『びぶろす』の「特集：レファレンスインタビュー」への寄稿において、第一から第四への変遷を、「意識化」「言語化」「定式化」として「情報ニーズの進展」と表記している (図1左)*⁵。

3.3 Lancaster ほか (1993) における検索語と索引語の照合を既刊邦語著作に拠って確認すると

一方、岸田和明氏は著書『情報検索の理論と技術』において Lancaster ほか

（1993）の論文から：

最終利用者/仲介者：

検索質問 ⇒概念分析および翻訳 ⇒検索式
 ≡ 図1中央における **検索語**

索引作成者：

蓄積される文献 ⇒概念分析および翻訳 ⇒文献の表現
 ≡ 図1中央における **索引語**

の過程を図示して、「伝統的な文献検索における文献と検索質問との照合」の図1.2としてまとめている*6。

次に掲げる本稿の図1は、上記3.2/3.3に示した三輪、渡邊、岸田の三氏の論考・挿図を踏まえて加工の上、接続させて、「検索語と索引語の生成とそのマッチングとしての情報検索」とキャプションしたものである。

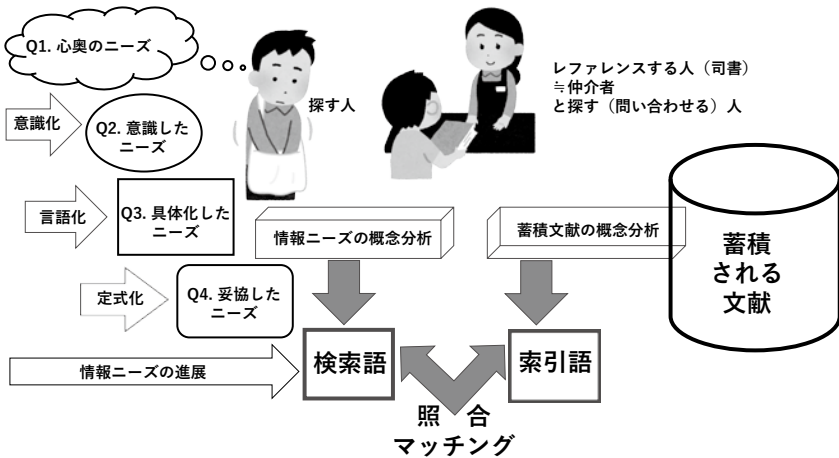


図1 検索語と索引語の生成とそのマッチングとしての情報検索

- * 1. Taylor, R.S. Question-negotiation and information seeking in libraries. *College & Research Libraries*. Vol. 29, No. 3, 1968.5, p. 178-194.
<https://crl.acrl.org/index.php/crl/article/view/12027/13473>
- * 2. Lancaster, F. Wukfrud et al. *Information Retrieval Today*. Information Resource Press, 1993, 341p. * 6. の岸田文献から。
- * 3. 「おわりに」中公新書, 1714, p. 204.
 今日のサーチャーの育成・検定事業については、INFOSTA の下記サイトを参照されたい。
<https://www.infosta.or.jp/examination/>
- * 4. 同書, p. 40-41.
- * 5. 「レファレンスインタビューの意義と方法」『びぶろす』75, 2017. 1, p. 3-9.

https://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_10266755_po_75.pdf?contentNo=1&

なお、2018年3月、「講座・図書館情報学」の第6巻として刊行された『情報サービス論—情報と人びとをつなぐ図書館員の専門性』（ミネルヴァ書房）の3章4節（担当：長谷川幸代氏）においても、Taylorのこの論文は「図3.4 情報ニーズの4つの段階」の作図を伴って紹介されており（p.70-71）、第三段階「検索質問：金魚はどうやって育てるのか？」から第四段階「検索クエリ：金魚 育て方」というように遷移する具体例を示している。以下に図2として再掲する。

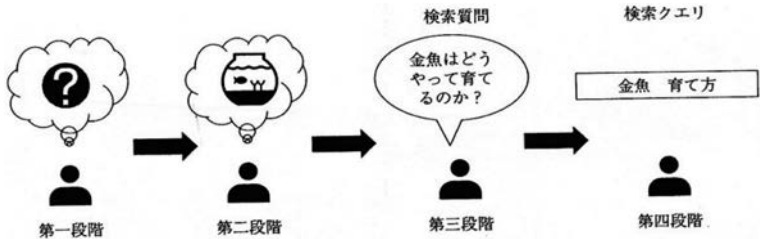


図2 情報ニーズの4つの段階

* 6. 「図書館・情報学シリーズ3」（勁草書房、1998）として刊行され、p.9に「図1.2 伝統的な文献検索における文献と検索質問との照合」を掲載。

4. 「途方に暮れ」ながらの検索を考える

上記の3.2で紹介した三輪氏の第二の著書の副題が「未知の問題をどう解くか」であったことに示されるものは、本稿の「1. はじめに—そして僕は途方に暮れる」で示した問題意識と通底している。

それは、日常化した検索に時として気配する「寄る辺の無さ」を克服し、乗り越えるための解法への志向であるように思われるのである。

その事は、三輪氏のTaylorを紹介した「2.1 情報探しの特徴」に続く「2.2 プロセスとしての情報探し」において、「二つの検索システム」として詳述されている。長くなるがキーポイントなので下記に引用する：

既知検索に対して：

存在するかどうかさえ分らない未知の情報を探す場合には、キーワードはほとんど頼りにならない…自分がどんな情報を探しているかを言葉で説明することができないからである…つまるところ、情報検索システムとは、自分がどんな情報を探しているかを説明できない探し手に対して、情報ニーズを的確に示すキーワードの入力を要求する、なんとも矛盾した仕組みなのである*1

段落を変え、続けて：

にもかかわらず、わらをもつかむ思いで情報を探している人は、無理やりキーワー

ドをひねり出して…検索画面に入力する*2

いささか身も蓋も無いような書きぶりではあるが、ここはまだ本書の冒頭部に置かれた著者の主たる問題意識の表出である。以下、解決策の提示のための筆が、最終章の「5. 情報スキル」へと向かっていく。

先に紹介した小林氏の著作にあった「「未知文献」を見つける方法がある」ことは、この「わらをもつかむ思いで情報を探している人」への救いの手として、図書館学的（技術）の精華である「件名」に逢着することであるのは、第5講の「まとめ」において次のように述べられている：

適切な件名をゲットできれば、少なくとも戦後の本で自分の知りたいことが主題になっている本があるかどうか、わかる*3

という一文から明確に伺えるのである。

* 1. 『情報検索のスキル—未知の問題を道どう解くか』 p. 48-49.

* 2. 『情報検索のスキル—未知の問題を道どう解くか』 p. 49.

* 3. 『調べる技術—国会図書館のレファレンス・チップス』 p. 72.

5. recall & retrieval 想起と検索

5.1 実は未知検索は「脳内検索」という「想起」の行為から始まるということ

三輪氏が書かれた「にもかかわらず、わらをもつかむ思いで情報を探している人は、無理やりキーワードをひねり出して…検索画面に入力する」という検索行為のプロセスにおける「ひねり出し」は、本章の章題に即せば、「脳内検索」という「想起」であることを図2に示しつつ、さらに考えてみたい。

既知検索：

⇒自分がどんな情報を探しているかを説明できる探しもの

⇒検索語の創出（発見）が容易であり、ほぼ即時的に「体外検索」が可能である

未知検索：

⇒自分がどんな情報を探しているかを説明できない探しもの

⇒検索語の創出（発見）が難しく、何らか我が身への問いかけという「脳内検索」が必要・必須

⇒時間をかけて「脳内検索」して創出（発見）した検索語による「体外検索」が可能となる

しかしながら、その検索語の妥当性は誰にも保証されていない

ここで言う「脳内検索」こそが「想起」、すなわち我が身の頭、脳内への“想起こし”という「想起」へと誘われて、初めて可能となるのである。

以上を踏まえて、1. から 9. のステップに整理して、図 2 として示した。

1. 情報要求
2. どんな言葉で
3. 想起する
4. 脳内検索
5. この言葉で検索する！検索語
6. DB への情報検索
7. DB の内に蓄積されたレコードの索引語
8. マッチング
9. 検索語と索引語とのマッチングが検索の成功の鍵である

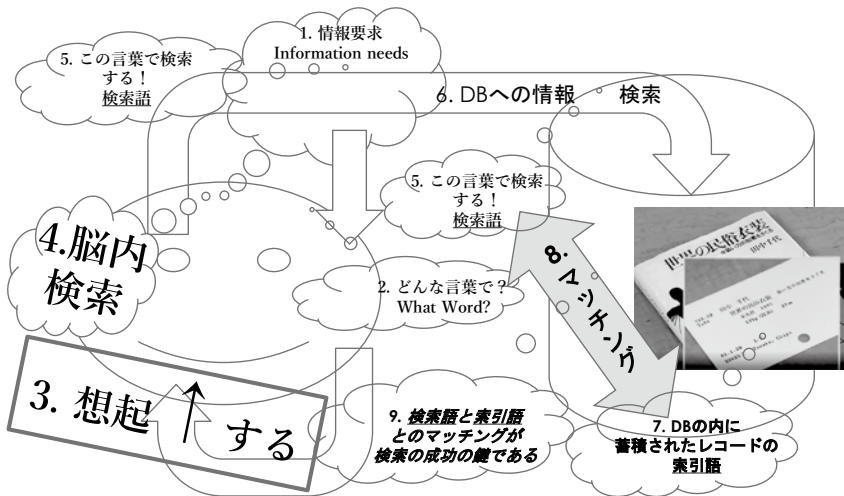


図 3 「想起」から始まる「脳内検索」から「体外検索」へ「検索語」と「索引語」のマッチングへの過程

5.2 想起とプラトンとアーリントンについて

未知検索が「わらをもつかむ思い」だとか「ひねり出」すとか、苦渋に満ちた行為であるかのように書き連ねてしまったが、「情報の蓄積 (storage)」を「記憶 (memory)」に振り替えて、「脳内検索 (inner retrieval)」を「想起 (recall; reminiscence)」において、と読み替えると、見えてくる風景、その様相は瞬く間に歴史的で文化史的なパースペクティブを持ち、なにも 20 世紀の末尾に忽然と現れた、あたかもオディロン・ルドンが描いたあの《キュクロプス (Le Cyclope)》のような、「一つ目の巨人」的 Google にのみ収斂されることにはならないだろう。

かつて東京国立近代美術館でもっとも早く、かつ「原理的な」現代美術の「国際的なグループ・ショー」となった〈現代美術への視点〉シリーズの初回、「メタファーとシンボル (Metaphor and/or symbol, 1984-85)」展をキュレーションした本江邦夫氏 (故人) は*¹、その後日の1988年、出品作家の一人であったエドワード・アーリントン (Edward Allington) の個展のカタログに「アーリントン— “想起について”」の一文を寄稿し、次のように書いている*²。

(アーリントンが)

本質的にプラトニストであること…よくしられているように、プラトンの対話篇にあっては、おもいおこすこと、想起は本質的な役割をはたしている。

また、

おもいおこすことそれ自体のうちに、天てきなものへの第一歩が、跳躍がはじまるのである。あのアイデア論にしても、想起というモチーフを欠いてしまったら、その官能的ともいべき魅力の大半を失ってしまうだろう。

と。

本江氏が指摘したようにアーリントンがプラトンの「想起」に古代ギリシアとを重ねた作品こそ、図3の《杯に見とれる二人のアポローン》であり：

(実体であり影ないし写しという)

対立関係にあるふたりが、とにもかくにもおなじひとつの杯をながめている、あえていえば想起している、まさにこの点にこの作品の本質があると論じていたのである (傍点は本江氏による)。



図4 cat. No. 10 《杯に見とれる二人のアポローン》

Edward Allington: *Two Appollos Admiring a Vase* 1987, resin casts, plastic and painted wood, 139.7 x 66.0 x 45.7 & 53.3 x 28.6 x 17.1 cm Photo by Eiichiro Sakata

5.3 記憶術と想起と検索について

至極当然のことではあるが、歴史的に見れば、「情報の蓄積」は電子的なデータベースである以上に図書館あるいはアーカイブにおける「記憶 (memory)」においてより一層、親和的である。

フランセス・A・イエイツの記念碑的業績である『記憶術 (*The Art of Memory*)』が世に出たのは1966年であるが*3、そのイエイツが拠点としたロンドンのヴァールブルク研究所こそ、その基を築いたアビ・ヴァールブルク (Aby Moritz Warburg, 1866 - 1929) の畢生の研究大成〈記憶の女神〉の名を持つイメージ・アトラスとしての《ムネモシュ》の生育の地であったことこそ、「想起」しなければならない*4。

近年、旺盛な筆力を全開する桑木野幸司氏による『記憶術全史』は「ムネモシュネの饗宴」を副書名に持つものだが、(記憶術の)「核心を…ごく単純化して述べ」て次のように書いている*5。

心の中に仮想の建物を建て (= 器の準備)、そこに情報をヴィジュアル化して順序よく配置したうえで (= 情報のインプット)、それらの空間を瞑想によって巡回してゆく (= 取り出し) — たったこれだけである

この説明は、記憶術の始祖であるシモニデスの宴の座席とそこに座っていた人間とを対応させて記憶する「座の方法」(場所法)に由来するのであるが、「=」に続く部分を情報検索に見立てるならば：

= 器の準備	データベース (ファイル) システムの構築
= 情報のインプット	メタデータの蓄積であり索引語 (indexing terms; descriptors) の整備
= 取り出し	検索システムの構築

ということになるのだらうし、「心の中に仮想の建物を建て」る行為もまた「想起」へのプロローグであることを忘れてはならないだろう。

- * 1. 「メタファーとシンボル (Metaphor and/or symbol, 1984-85)」展の図録の「序論」(p. [4]-12) に「プラスチックの食品見本などを集めて奇怪なシンボルを作り上げるアーリントン」と書いているが、後日、『絵画の行方』(スカイドア, 1999) に再録の同文からは、「個々の出品作家にかんする寸評」はすべて割愛されている。なおその図録には、作家・作品解説として別著者による一文が掲載。
- * 2. 「エドワード・アーリントン 彫刻/ドローイング」展 (フジテレビギャラリー, 1988.1.23-2.13) 図録所収、英文併載, n. p.
- * 3. 玉泉八州男監訳『記憶術』水声社, 1993.
- * 4. 山口昌男『本の神話学』(中公文庫, 1977) の「二十世紀後半の知的起源 3 精神史の中の

ワールブルク文庫」, p. 18-41. もまた、あらためて記憶されるべき一文である。

* 5. 『記憶術全史—ムネモシユネの饗宴』講談社, 2018, p. 8.

記憶を考^{recall & retrieval}える時、「座の方法」がその起源としてあり、「そこに情報を^{recall & retrieval}ヴイジュアル化して順序よく配置」(傍点は水谷による)するのが、記憶の術の要であるが、ここにおいては、記憶の対象としての事項と同時に「索引」をも暗記されていると考えることよって、記憶術によりメモライズされた総体の内にすでに検索の術としての「索引」が内包されていると理解するならば、多くの記憶術にかかわる著作(例えばバオロ・ロッシの『魔術から科学へ』『普遍の鍵』)に記憶のための「網羅」「収集」(傍点部はS先生による)などが語られる一方で、「蓄積」からの取り出しの術としての「検索」が顧みられていないこと^{recall & retrieval}の理由付けがあるように、いまは見当しておく。以上は、前回の連載で登場を願ったS先生とのメールでの議論に基づく。ここは今後のさらなる思考実験の課題である。

桑木野氏の新刊『ルネサンス 情報革命の時代』(ちくま新書, 1655, 2022)の書評(朝日新聞, 2022.7.2)で評者(藤原辰史氏)は、冒頭に「五〇〇年前の話なのに、全然古くさくない…私たちが情報大爆発の時代にどの情報を選び、何を考えていくか、途方に暮れているからでもあるだろう」と書き、「スマホを手放せない私たちの解毒剤になりそうだ」と締め括っていることを本章「想起と検索」の末尾に記録しておきたい(傍点、水谷による)。

6. おわりに—アーカイブに描き込まれたアーリントンの《コルヌ・コピア》

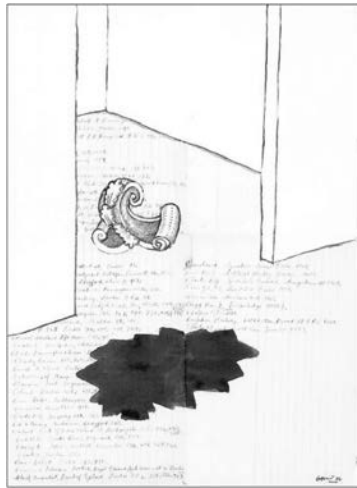


図5 cat. No. 13 《かたつむりの角の間に no. 3》

Edward Allington: *Between the Horns of the Snail no. 3* 1984, Ink and emulsion on paper, 53 x 39.5 cm

図4のアーリントンのインスタレーションには古代ギリシアのアポローンが二人現れたが、同じ機会の展示には、図5のように古さびた会計帳簿のページを張り合わせて、そこにギリシア神話に出てくる「望むがままに果物を満たす豊穡の角」《コルヌ・コピア》が描き込まれていた。

冊子だった古帳簿というアーカイブから切り取られた断片を支持体とし、そこに描かれる《コルヌ・コピア》は、いつの？ だれの？ なんの〔ための〕記録？ etc. という重層する疑問を「想起」させるとともに、その行為にこそ豊穡の始原もまたあることを《コルヌ・コピア》の形象が実像化させている、と見ることはあながち過剰な深読みであるとは言えないだろう*1。

そして、もっとも今日的で先端的な技術課題である情報の検索の「術」が、古代からの記憶術と想起、あるいは連綿と続くライブラリやミュージアムやアーカイブの蓄積と、いままでも、そしてこれからもまたまっすぐに連なっていることを確認するのである。

- * 1. 本稿と同年度において刊行の本学『文学部紀要』第58号に掲載の拙論「アート・アーカイブを再考するということー作品の「生命誌」を編む」に与って」はさまざまに関係する。また、「アーカイヴァル・アート」の関連文献として、香川檀『想起のかたち 記憶アートの歴史意識』水声社, 2012, 365p.; せんだいメディアテーク発行『想起の方則』(2015)に所収の香川「徴候をディスプレイするーアーカイブ・アートとしての「記録と想起」展」(p.54-66)を本稿の注においても掲げておく。前章に書いた課題と同等の重みを持つものであり、今後のテーマとして記しておきたい。

図版出典：

図2 長谷川幸代「4.3 図書館における情報ニーズ」『情報サービス論ー情報と人びとをつなぐ図書館員の専門性』(ミネルヴァ書房, 2018) p.71.

図45 「エドワード・アーリントン 彫刻/ドローイング」展(フジテレビギャラリー, 1988.1.23-2.13) 図録